ピューリタニズムの軌跡

—— Mrs. Anne Hutchinson and Antinomianism ——

岡　本　雅　夫

岡山理科大学教養部

(1992年9月30日　受理)

はじめに

Nathaniel Hawthorne (1804—1864) は，1830年から1832年にかけて，New England の歴史から題材を得たスケッチ風の三つの短編を，the Salem Gazette に発表している。Mrs. Anne Hutchinson は，その一編である。New England 初期の植民地時代で，最も啓示的議論の一つであり，アメリカの知性の歴史の開幕の第一章とされた Antinomian Controversy をひき起した女性のスケッチを，Hawthorne は自らの女性観や宗教観によって色付けをし，いかにも Hawthorne 風に仕上げている。この小論では，Hawthorne の作品を軸に，Anne Hutchinson の異端とされた antinomianism と，ピューリタン信仰の正統を任じ，'a city on a hill' を理想とする Holy Commonwealth 建設を目指した John Winthrop (1588—1649) の信仰理念との対立に焦点を当てて，ピューリタニズムの軌跡をたどってみたい。

Ⅰ. Mrs. Anne Hutchinson (1591—1643) の実像[1)]

Anne Marbury は，英国 Lincolnshire の港を臨む Boston 市から程遠くない Alford で生れ，そこにある教会の牧師であった父親の影響を受けて育った。20歳の時に，London の商人 William Hutchinson と出会い，生れ育った自分の家で新居を構えている。ヨーロッパ大陸における宗教改革に係りを持った人達の指導の下で，徐々に英国内でも宗教的革新運動が拡がり始めていた頃であった。そして，英国王の支配する監督教会の内部で改革を目指していた Puritans の一人で，Cambridge を出たばかりの若い牧師 John Cotton (1584—1652) が，1612年 Boston の St. Botolph's 教会で説教を始めている。Hutchinson はこの説教を聞くために，Boston のその教会へ通うのであるが，この牧師こそ，長年自分を苦しめてきた不安から救い出してくれる，「もし，Mr. Cotton が追放されたら，英国で耳を傾けて聴きたい牧師はいない，」[2)] と思うまでに傾倒したのである。

Cotton は，同じ Puritan で，英国では最早敬虔な "ancient faith" は保てないと信じる John Winthrop が，新天地で Holy Commonwealth を設立するという理想に共鳴し，Southampton で訣別の説教 (God's Promise to His Plantations) をしたが，次第に強まる監督教会の圧力の中で英国を離れる決心を固め，1633年，自ら Massachusetts Bay

Colony に渡り，Boston にある the First Church の "teacher" に就任した。

Hutchinson は，しばらく躊躇した後に，夫と共に大西洋を渡り，John Cotton の指導の下にある会衆（congregation）に加わったのである。荒涼とした原野で，林を切り開いて住居を定め，"the meanness of the place" にも慣れてきた Hutchinson は，英国で，半ば専門職の仕事として，産褥にある女性や，病床に伏している女性に，何かと助言をして歩くことをしていたが，その仕事を再び始めたのである。やがて，Hutchinson は，平信徒の集りを持つようになり，その会合で，お互いの宗教的体験を話し合ったのである。こうした集会で，植民地の精神的守護者である聖職者についての不満が呟かれるようになった。Hutchinson は，遂に，「主を祝します。主は私に潔白な牧師と間違っている牧師を見分けさせて下さいます。」(I bless the Lord, he hath let me see which was the clear ministry and which the wrong.)[3] とまで言うようになったが，これは明らかに，Cotton，義弟の John Wheelwright，そして恐らく Thomas Shepard を除いて，Massachusetts の聖職者のほとんどの者が，所謂二流であるということを意味するものであった。1637年になると，Hutchinson の指導力の下で，植民地全体に，急速に，しかも烈しい党派根性で，ある種の分裂が生じ始めたのである。Boston の the First Church の大多数の信者が，Cotton は恩恵についての真の福音（the true gospel of grace）を説いているが，Cotton の同僚達は，業の契約（a covenant of works）を説いているという Hutchinson の主張を支持したのである。

Hutchinson の，New England の牧師達に対する非難は複雑なもので，しかも，彼女の裁判の記録で証明できるように，対立する人間に沈黙させてしまう際立った機知によって，その非難は強められていった。何よりも Hutchinson が反対したことは，聖化(sanctification) ―キリスト者としてのふるまい(Christian behavior) ― が，恩恵の最終的基準としての聖霊による内面的しるし（the inner seal of the Holy Spirit）と置き換えられていることであった。外面的なキリスト者としての適切さ（external propriety）が，神の恩恵（God's favor）のしるしとしての内面的変化（inner tranformation）と入れ代ろうとしていることを非難したのである。New England の精神的状況についてのこの批判によって，Hutchinson に攻撃された聖職者の心に浮んだのは，放縦な '律法不要論者'(licentious "antinomians")（ギリシヤ語 ― anti-nomos = 英語 ― against laws に由来する）が，救済（salvation）の要件として，モーセの律法（commandments）を遵守することを説く牧師を嘲けり，興奮の余りうっとりする姿であったと言われている。しかしながら，こうした "律法不要論者" (antinomian) に対するさまざまな不安は，大して根拠はないように思われていたのである。Hutchinson を支持する市民のほとんどが真面目な人間で，その中には，規律正しい商人も多くいたからである。更に Hutchinson は，恩恵（grace）と，キリスト者の '態度'（Christian 'carriage'）との結び付きを否定はしなかったからである。

Hutchinson が否定したのは，聖化は，義認（justification）の原因，或いは証明である

ということであった。Hutchinson が主張したのは，Massachusetts の指導者達が，業の契約（a covenant of works）に陥ってしまっている，そして，モーセの律法に従うことを主張する牧師達（Legalist）は，聖化（聖徒が罪と戦って勝利すること）を，神の選びと誤って考え，業と贖罪（redemption）は，何ら必然的な結び付を持たないことを理解していない，ということであった。本質において，Hutchinson は，業は無効果であること，そして聖徒が持つ救いに対する絶対的確信を特色とする，神によって無償で与えられる恩恵（free grace）の教義を代弁したのであった．

1637年1月，植民地内での精神的忠誠をめぐる争いを調停しようとして，Cotton は，John Wheelwright に，the First Church の会衆に，"fast day"（断食日）の説教をするように要請した。この Wheelwright は，Hutchinson の主張する教義の熱心な支持者であったので，この説教を煽動的なものにしたのである。Winthrop が言ったことによると，Wheelwright は，行政官（magistrates）や牧師（ministers）に敵対する気持を一層痛烈にしかも激しくかき立てたのである。

Wheelwright は，後に告発され，反乱罪に問われている。Hutchinson の抗議の核心は，植民地内に反乱を起そうとか，権威を侮辱しようとするものではなかった。彼女に感じられたことは，牧師達の心の中で敬虔さが冷えこんでいて，その結果，信徒もそうなってしまった。牧師達の説教や献身が機械的になって，一連の義務を果して社会的報酬を受けていると感じられたのである。

1637年の8月，植民地での初めての教会会議(synod)が開かれ，聖職者達はHutchinson を始めとする律法不要論者の冒している誤りを暴露し，Hutchinson が提示している82の命題を論駁した。それから3ヵ月もしない内に，Hutchinson 自身が，Wheelwright を弁護する請願書に加わっていることが主に原因して，様々な民事上の告発を受け，地方集会（General Court）へ出頭を命じられたのである。

この Hutchinson に対する尋問の中で，彼女は，異端者が陥る妄想（heretic delusion）に取りつかれている証拠とされてしまう発言をするのである；「聖霊が"直接の声"で私に話したのです」。Hutchinson は，悔悟することのない人間であるという刻印をうたれ，英国からその人を慕い，後を追って Massachusetts までやって来た当の John Cotton にも見棄てられて，the First Church を破門され，Rhode Island へ送られた。そして1642年，夫が死ぬまで，家族や彼女に忠実な信奉者と共にその土地に住んだが，その後 New York のオランダの支配区域である土地で，Hutchinson を中心とした小さな Colony を営んだ。1643年，オランダ植民地のインディアンとの戦い（Dutch-Indian War）で，インディアンに襲われ，只一人の生存者を残して，Hutchinson を始め全員が殺されたのである。以上が，Anne Hutchinson についての実録である。この New England の歴史で有名な事件を，Hawthorne がどういう構成で仕上げているかを読み，Hawthorne の視点を考察してみたい。

II. Hawthorne の 'Mrs. Anne Hutchinson'

Hawthorne : Tales and Sketches (the Library of American) に収められている 'Mrs. Anne Hutchinson' は，1830年から1850年の間に書かれた約100編の tales and sketches の中の1編だが，多くの話が，Twice-Told tales, Mosses from an old Manse そして The Snow-Image, and Other Twice-told Tales に収録されているのに，この 'Mrs. Anne Hutchinson' は，他のいくつかの伝記風の sketch などと一緒に新聞や雑誌に発表されたままである。ということは，収録された話には訂正や改訂を施したとされているので，この 'Mrs. Anne Hutchinson' は，the Salem Gazette に発表したままの未修正の作品ということになるのであろう。まだ若い創作活動初期にあった Hawthorne の鋭敏な感性や人間の本性に対する洞察力，ユーモアや諷刺に満ちた筆致，冗長に流れない用語法が十分に味わえる作品の一つと思われる。

Anne Hutchinson が発生源であるAntinomian case についての資料を手にして，このスケッチを創作したのは当然であるが，Hawthorne が描いた Hutchinson には，史実の文脈の中に在っても，それを越えて Hawthorne が直視する真実の女性像が表現されている様に思える。一方で，その女性像を浮かび上らせるために，Hawthorne が宗教上の対立点を省略，或いは簡略にした部分もある。こうした点を，七つの節から構成されているこのスケッチを第一節から順を追って考察していくことにする。'Mrs. Anne Hutchinson'[4] は，次の書き出しで始まる。

> "The character of this female suggests a train of thought……"[5]

第一節の冒頭で，いきなり this female と指示形容詞をHutchinson につける手法は，同じ様な伝記的スケッチである 'Dr Bullivant' (1831) で，"This person was not eminent enough……" と書き出しているのと同じであるが，この効果は，相手に向って，「噂で既にご承知の例の人物ですが，実はこの女性の……」と話し始める，まるで内緒話をするかの様な親しみを感じさせるものであるが，Tales and Sketches の多くにみられる Hawthorne の工夫の一つであるように思われる。語り出しは親しみを感じさせても，この節で Hawthorne が激しく攻撃し始めるのは，Hutchinson と，同じ性癖を持つと断定する女流作家 (ink-stained Amazons) である。Hawthorne が，同時代の女流作家に腹立たしい感情を抱いていたことは，よく知られているが，この節は，蓋を取るといきなり Hawthorne の腹の中で煮えたぎっている怒りの熱湯のすさまじい蒸気が立ち昇る調子である。

> "But there are portentous indications, changes gradually taking place in the habito and feelings of the gentle sex, which seem to threaten our poerity with many of those public women, whereof one was a burthen too grievous for our fathers."[6]

優しかるべき女性 (gentle sex) の習慣や感情に徐々に変化が生じて，かつてのアメリカ建国の父達に，余りにも厄介な重荷と嘆かせた一人の女，つまり Hutchinson と同じ部類の，家庭にあって家族のために献身する女性とは全く逆に，家庭を省り見ないで社会に出て自己顕示欲を満そうとする女性を，public women と定義し，こうした女性が，現代の印刷機 (the press) を手段として，feminine ambition を遂げようとしていると，女流作家を Hutchinson と同一視している。

Hawthorne の女性観はここでは徹底していて，男性と女性の区別は厳然として存在していると，神の代りに Nature を持ち出して主張する。そして女性作家に対する 'false liberality' (偽りの寛大さ) や 'courtesy' (礼儀正しさ) によって，厳しい批判をしなければ，危なっかしい幼児期にあるアメリカ文学は，'girlish feebleness' (女の子の様な弱さ) を持つことになるだろう。そしてその様な悪害はこれから増大しそうに思われる，と主張して，Hutchinson が Massachusetts でピューリタンの社会に，災厄をもたろうそうとしていた事件と重ね合わせている。

Hawthorneは，現代のアメリカ女性の大多数はこうした public women ではなくて，家庭を自らの居場所とする domestic race であるが，女性に対して判断を誤った煽動が続けられると，大衆の支持を大して得られないから限度はあるものの，段々と限りない程に数多くの女流作家 (ink-stained Amazons) が，男性作家を締め出すことになるであろう，と言って，これは少し誇張が過ぎる予言だと認めつつも，飽く迄女性は，作家に適さないし，目指すべきでないと主張する。

> "……is it good for women's self that the path of feverish hope, of tremulous success, of bitter and ignominious disappointment, should be left wide open to her? Is the prize worth her having if she win it?"[7]

熱い希望，不確実な成功，苦く屈辱的な失意といった，男性が歩むべき道が女性に広く開かれていることが，果して女性の自我にとって良いことであろうか。そのような道を歩んで成功が得られるとして，その成功は女性が手にする値打ちがあるだろうか。Hawthorne は，男性が女性に払う敬意は名声によって増すものではないと断定している。

女流作家が世間の人に眉をひそめさせるのは，いかにも心の秘密を探らせるかのように女性の裸の心を世間の人の注視にさらすことである。

結局のところ，Hawthorne は，Hutchinson と女流作家が危険である点は，女性は公けの場 (at bar) で，自分達の異常さ (irregularity) を正当化しようとすること，自分の心の内にある神の命令 (the command of Heaven within her) のように天分に恵まれた衝動を感じる時，女性のものである愛らしさ (loveliness) の一部を捨て，内面の声 (the inward voice) に従うことである。

この第一節で，Hutchinson と女流作家とを同列において論じる Hawthorne の口調は，

興奮の余りいささか脱線気味ながら，第二節から始まる伝記的スケッチで浮かび上る Hutchinson の人間像を予告するに十分である。

第二節から，本格的に Hutchinson's biography が始まる。

Hawthorne は，Hutchinson は，並外れた才能（extraordinary）と，強力な想像力（strong imagination）を持つ女性で，特にその想像力が，17世紀のピューリタン植民地の熱を帯びた雰囲気の中で，彼女を宗教革新を目指す方向へ駆り立てたとしている。そして，Hutchinson 特有の性癖として，英国で異常で大胆な思考をする徴候（symptoms of irregular and daring thought）があったとしている。この点は第一節でも触れていることだが，'irregular' という形容詞で，そのまま 'public woman'，'reformer' を意味している。そしてこの '異常な'（irregular）ことは，Hutchinson が，Massachusetts へ John Cotton の後を追って渡ってきたが，この地でも心の平安を得られず，'奇妙で，危険な' 意見（strange and dangerouse）を広め始めたことへつながっている。そして Hutchinson が自分の集会で説く '奇妙で危険な意見' とは，業の契約（a covenant of works）を否定し，神の無償の恩恵（free grace）を信ずるという，聖書の解釈にかかわる重大な問題である。この Hutchinson の意見が律法不要論（Antinomianism）として正統ピューリタニズム（orthodox puritanism）から批判され，以来，'Hutchinson' という語は，New England では，'antinomian' を意味する記号になったとされている。又もう一面で，Hutchinson の説く意見は，Massachusetts 植民地存立の基礎であり，植民地を支える不可欠の原理を否定する点で危険極まりないものであった。この後者については，Hawthorne は，第四節で触れているので，ここで，前者の antinomianism について述べておきたい。

Antinomian という語は，Luther によって，ドイツで Johannes Agricod を攻撃するのに作られた。そして John of Leyden や Munster Rebellion（1533）での再洗礼派（Anabaptist）の指導者にもこの言葉での批判があった[8]。

antinomianism は，改革神学の中で，キリスト教の二つの中心的事実；キリストによる無償の贖罪（the unmerited redemption by Christ）と，罪と悲惨のこの世における存続（the continued existence of sin and misery）に新しい関係を示した。義認（justification）は，堕落した人間（fallen man）にも無償で与えられる神からの賜物（free gift）であり，義認が与えられなければ，全ての敬虔な努力は何の役にも立たない。回心（conversion）の瞬間に，聖徒（義認を与えられた者）は，空の器のように，浄められて，キリストの愛に満される，そしてこの神の働きによって，選ばれた者は，神の法の下における責任から解放されると同時に，神の選びを確信する，というのが Antinomianism の主張である[9]。

従って，個々の人間の存在（individual identity）は，キリストの働きと一体化する。或る英国の antinomian が説明したように，義認された人間の全ての行いの中でキリストは行動する。その人間の内部にいるキリストの全ての行いの中で，その人間は行動する。最低であれ最高であれ，キリストはその人間の中で行為をするのである。

antinomian は，自分が選ばれていることを確信して，行為は，それが現実的であれ象徴的であれ，価値を持たないと考える。聖徒（saint）をキリストと解き難い程に結び付いていると見做し，聖徒は，その個人性（individuality）が働くための手段に過ぎないとする。従って聖徒達の経験は，神の本質（nature of divinity）が必然的に不変であるが故に，お互いに合致するものである。かくして，'神のものである人間'（those who belong to God）は，神の民と神に棄てられた民（the reprobate）を区別できるのである。

アメリカにおける Hutchinson を指導者とする antinomians は，Massachusetts の植民者達が，新大陸で神の仕事（God's work）を果す約束に拘束されている，神に選ばれた人間であることを斥けて，その代りに，神に選ばれた人間の神秘的共同体という概念を与えたのである[10]。

第三節では，Hutchinson が，余りにわびしく荒涼としているので失意の涙を落したといわれる植民地に出来た許りの部落の夏の夕暮れに，新しく建てられた粗末な荒削りの丸木小屋の家で，フードをかぶった女達や尖り帽をかぶった男達が詰めかけて，Hutchinson が主宰する集会が開かれている情景が描かれている。

> "At the upper end, behind a table on which are placed the Scriptures and two glimmering lamps, we see a woman, plainly attired as befits her ripened years ; he hair, complexion, and eyes are dark, the latter somewhat dull and heavy, but kindling up with a gradual brightness."[11]

一番奥まった所に，何冊もの聖書（Geneva Bible で，注解が非常に多い。欽定聖書でなかったことが，antinomian 論争の対立点だとされている）が置かれたテーブルの後に Hutchinson が居る。髪や膚の色，眼の色も暗い（dark），そして，鈍重に見える眼は，次第に輝きを帯びて光り始める。質素な服装は，熟年の女性にふさわしいものであったが，Hawthorne は，この質素な装いを，Hutchinson の内側に秘められた異常さを隠し，際立つ才能や機知，聴く人を圧倒する雄弁を引立てさせるために用意しているようであると描いている。しかし実際に，植民地の生活は，厳しく貧しいものであった。

Hutchinson の右手と左手に全く対照的な二人の人物を配している。右手の若い総督 Vane は，陰うつな表情で，薄暗い明りによく調和し，眼には何か秘密めいた光りがある。Hutchinson の教えることが騒動を起し，自分の権力を振るい楽しむことができるかもしれないことを，回転の早い頭で予測して，自分が支持する Hutchinson が示す '暗い，不気味な熱意'（dark enthusiasm）に似た熱気を，眼の光りに漂わせている。

これに対して，左手に坐る John Cotton は，Hutchinson を Vane 程は支持していないことを示すように，少し後ろに位置をずらせている。若くもないし，何かに熱くなることもない，穏やかで重厚な老境に入ろうとする人物である。学識も深く，長年聖職にある人間として心浄められ，風貌も尊敬を集めるものである。ここで，Hawthorne はさり気なく，

次の一文を置いて，Cotton との関係や Hutchinson の影響力の大きさを示している。

> "He also is deceived by the strange fire now laid upon the altar, and he alone among his brethren is excepted in the denunciation of the new Apostle. ……"[12]

高徳の聖職者で，Winthrop と並んで，Massachusetts の宗教界の指導者も又 Hutchinson の 'strange fire' に欺かれていて，同僚の中で只一人この新しい '使徒' を自任する女性を非難しないのである。他の聖職者達は，Hutchinson の正面に陣取って，Hutchinson が煽動的な教義を述べ立て，その教義を証拠立てるのに熱くなっていくにつれて，今にも叩き伏せようとする様子で，厳しい顔付きや態度でひそひそと話し合っている。

Hawthorne は，Hutchinson の教義に耳を傾ける人達の反応を三つの層に分類しているが，説得力のある，適確な表現力でそれを描写している。

> On the foreheads of the aged, the mature, and strong-minded, you may read steadfast disapprobation……; the females, on the other hand are shuddering and weeping, and at times they cast a desolate look of fear around them; while the young men lean forward, fiery and impatient, fit instruments for whatever rash deed may be suggested.[13]

年配の年輪を重ねた，成熟した年齢に達した人達の額には，はっきりと不満の色がある。これに引き換え，女達は身を震わせ啜り泣き，不安な顔で周りを見廻し，若者達は，前方に身体を傾け，熱くなっていらいらし，どんな向う見ずな行為が仄めかされようとも，直ぐにそれを実行に移しそうであった。この激しい感情をかき立てるとは，何という雄弁であろうか。Hutchinson が，聖書を引いて説く antinomianism は，彼女の雄弁によって，一層その影響力を及ぼしたことを，Hawthorne は強調している。そして Hutchinson の問題の発言は，極めて簡潔に，しかも決定的な響きを持つ言葉で表現されている。

> "The woman tells them, (and cites texts from the Holy Book to prove her words) that they have put their trust in unregenerated and uncommissioned men, and followed them into the wilderness for naught."[14]

'unregenerated' and 'uncommissioned' men とは，puritan の正統から言えば，教会員の資格すら持てない人間である。そんな人間に従ってこの荒涼たる土地へやって来たとは，何という無駄足を踏んだことか。この発言は，Winthrop を指導者として Massachusetts Bay Colony を，'a city on a hill' の如くに建設しようとする構想全体を否定するものであることは明白である。この発言の内容については，Hutchinson の尋問の場面で明らかにされる。

第四節では，Hutchinson の集会が，植民地に与える危険な影響について，Massachusetts

政府は最早看過できない段階に達している。Hutchinson が説く教義が許し難い理由を，Hawthorne は二つ挙げて示している。

> "The present case was a most remarkable case, in which religious freedom was wholly inconsistent with public safety, and where the principles of an illiberal age indicated the very course which must have been pursued by worldly policy and enlightened wisdom."[15]

宗教的自由は，社会全体の安全と相容れない，ということと，Puritans がMassachusetts に Holy Commonwealth を設立しようとする時に，この事業の参加者に John Winthrop が示した共同体の行政と教会に関しての原則は守らなければならないということであった。

宗教的自由が社会全体の安全と相容れないということについて，Hawthorne は直ぐに説明を加えている。

> "Unity of faith was the star that had guided these people over the deep, and a diversity of sects would either have scattered them from the land……or perhaps have excited a diminutive civil war was among those who had come so far to worship together."[16]

統一された信仰こそが，Puritans が大西洋を渡って，自らの信仰とその実践を果す国家教会 (state church) を設立することを可能にするのであって，様々な分派が生じれば，神聖共同体は分裂して内乱が起り，参加者も分散することになる。Hutchinson の集会は，植民地を破滅へ追い込む恐れがあったのである。

ここで Hawthorne の説明に奥行きを与えるために Puritan 神学の基本概念と，Massachusetts 植民地建設までの宗教的背景について，述べておきたい[17]。

Puritanism は，ヨーロッパ大陸の宗教改革の影響によって英国教会を 'purify' しようとする計画を持ったが，具体的には，カトリックの遺物を追放し，礼拝と教会の秩序に関して，十二使徒的な原理を確立する，改革された教義を英国へ持ち込んで教化に努める，聖職者も一般信徒も同様に，規律と福音的敬虔を復活させることなどであった。しかしながら，英国王の支配する監督教会（Episcopal Church）内で，Calvin の言葉を支えとして，改革を遂行することで満足できなくなり，より徹底した制度改革を求めるようになるのである。結果として，宗教改革の精神と革新的精神を共有し，行政府と教会が協力して公共の秩序を確立する社会，Holy Commonwealth を新大陸で建設することになるのである。

Puritanism の精神として挙げられるのが，アモス書（Amos 6 : 1）にある，「シオンで安易に暮らす者に災いあれ」(Woe betid those living at ease in Zion. Amos 6 : 1）[18] の予言的要求だとされている。そしてここで要求されている敬虔(piety)は，St. Augustine の敬虔であり，Puritanism は，1500年の宗教の歴史で唯一の事例とされている。何百人もの Puritans の日記や，何千もの説教が残っているが，全ての内面的意味は，St. Augustine

の Confessions に読み取ることができるといわれている。Puritan 神学は，この敬虔という主観的気分を外面化し，体系化しようとする努力であった。Puritans は，「シオンにくつろぐ」者達に怒りを覚え，その神聖さが眼に見える教会を持とうと決意したので，聖書(Holy Scriptures)に向ったのである，そしてその聖書の中に，自分が一市民として，又その職業において，神の秩序(God's order)の実りある一部となるように霊感を与える創造主(Creator)の証しを見出したのである。Puritans は，政府，憲法や法律は，人間の罪を抑制するために制定されている，従って神に忠実なるものである，と知ったのである。それ故に，良心の許す限りは，Puritans は法を守り，忠誠を守ったのである。又，自分の個人的生活を秩序づけること，社会を規制すること，教会を組織することなどに対して，聖書(Scriptures)に，非常にしばしば旧約聖書 (Old Testament) の中に，明確な導きを見出したのである。

個人的生活に関しては，Puritan は自分自身に対して，他人に対しても，性格の改革，無駄な気晴らしや虚しいみせびらかしの排除，真面目で，従順な敬神，などを要求した。聖書に啓示されている神の法 (God's law) について深く考えることによって，自らの罪深い状態について，悔い改めようとする認識を持ったのである。もし，Puritans が，聖霊の再生の働き (Holy Spirit's regenerating work) の経験を恵まれるならば，その Puritan は，"見える聖徒" (visible saint) として，'福音的従順' (evangelical obedience) という契約(covenant)によって，自分の一生を生き抜くであろうとされたのである。英国の Puritan の説教師は，全く新しい種類の英国人を求めたのである。その直截で真摯な，素朴なスタイルの説教は，'聖徒の改革' (a revolution of saints) を成し遂げることを目指したのである。

公的な生活においては，John Winthrop が言ったことであるが，"行政上も教会に関しても正当な形態の政治" (a due form of government both civil and ecclesiastical) を求めたのである。市民生活に関する事柄では，このことは，英国の法の伝統，政治形態，社会的伝統に対する尊重の念を要求したのである。義務を果す生き方に関心を持つが故に，Puritans は，神の法に従おうとする者を政府が妨害したり，困らせたりしない限り，破壊的というよりも，法を守る方であった。しかしながら，自由に思索をしたり，新生面を開こうとする勇気を感じる時は，比較的徹底した考え方をする Puritans は，現代の民主主義的理念の方向へ進んだのである。John Winthrop, Thomas Hooker, Roger William, 或いは William Penn が，現実的に主張したことは，Puritanism の最も偉大な政治哲学者 Algernon Sydney の理論的著作と同質のものであった。

Puritan 神学の最も特色ある傾向の一つは，宗教改革の教理 (Reformed dogma) を，契約の理念 (the idea of covenant) を用いて，公共の，又個人の宗教的要求に適応させることであった。契約神学 (federal theology) は，勿論，Puritan 以前の長い歴史を持っている。その神学の根源の一部は，Calvin の著作に見出される。Heidelberg Catechism (1563) (ハイデルベルグ教理問答書) に顕著であるが，契約理念 (covenant ideas) は，

ライン地方やオランダにいる一連の神学者たちによってさらに詳細に発展した。英国では Cambridge 大学に在職する数人の偉大な Puritan 神学者によって，精巧に作り上げられていった。Williams Perkins (1588—1602)，John Preston (1587—1628)，Richard Sibbes (1577—1635) そして誰よりも優れて，William Ames (1576—1633) であった。Ames は，儀式で聖職者が着用する白衣 (surplice) を拒否したために，1610年に大学での地位を放棄せざるを得なくなり，後に1622年から1632年にかけて，オランダの Franeker 大学で神学教授を努めた。その学生の一人 Johannes Cocceius (1603—1669) は，契約神学 (federal theology) を最も充足した，そして最も体系化した形で表わし，極めて影響力をもつ思想の一派の指導者となった。Ames 自身 New England における Puritan 神学に永続的影響を与えた。

契約神学 (covenant theology) の核心は，予定運命の神意 (God's predestinating decrees) は，巨大な非人間的な，機械的計画の一部ではなくて，福音に示される摂理によって，神がアブラハムの子孫との間で恩恵の契約 (a covenant of grace) を確立したということである。この契約は信仰によって与えられるべきものとされ，それ故に一人ひとりが同じ内容で与えるべきものとされたのである。Puritans の間では，神の働きがどれ程であるか，罪深い自然のままの人間が恩恵を受けるのにどれ位準備しなければならないのか，については意見が分れたのである。しかし，Puritans は，選ばれる聖徒への神からの実際に結果をもたらす呼び掛けは，神の約束に個別的に一人ひとりの人間が出会うことでやってくる，ということには同意する傾向があった。アブラハム (創世紀17) がしたように，人間は神と契約を結ぶことができる。勿論この神の約束との出会いは，神の主導 (the divine initiative) であるから，恩恵の賜物 (a gift of grace) なのである。実際，贖罪の契約 (the Covenant of Redemption) によって，父なる神 (God the Father) は，人間の救済を遂行するために，神の子 (his Son) と契約を結ばれたのであった。しかし，神の慈悲 (the divine mercy) を知的に認識する以上のものが人間には要求されたのである。

真実の信仰は，内面的で，明白で従順な準備 (inward, overt, and obedient preparation)，帰属 (appropriation)，謙遜 (humility)，献身 (dedication)，感謝 (gratitude) — そして，神の法に従って，神の道を歩くという責任を必然的に伴うものであった。明確な回心の経験 (a specific conversion experience) は，多くの者にとって，神に選ばれたことを確信する手段であったが，最初は規範的なものとか，必然的なものとは見做されてはいなかった。徐々に，Puritan の牧師や神学者が，自らを吟味し，熱心で悩みを抱く教区の信者の相談に応じたりするにつれて，真のキリスト教徒の経験についての形態論 (the morphology of true Christian experience) に関しての合意が形成され始めたのである。

やがて，アメリカに重大な結果をもたらすのであるが，英国教会 (the Church of England) 内の，非国教派 puritans (Nonconforming puritans) は，再生 (regeneration) の明確な経験を，神の選び (election) の不可欠のしるし (an essential sign) と見做すようになっ

た。New Englandやその他の場所でも，回心（conversion）は，教会員の資格にとっての必要条件となったのである。Massachusetts の Holy Commonwealth でも，教会は，神の実効ある呼び掛けを内面的に経験したという信頼できる証拠を与えることができることによって構成されるべきと考えられた。1630年頃には，この点についての合意はなかったが，個々の人間が自分の内面観照をしたり，集団的に心を探ることなどは，神からの呼び掛けを経験しようとする方向へむけられたのである。

1635年には，多分 John Cotton を指導者として，Massachusetts Bay Colony の指導者達は，共同体としての重大な決定に達した。それは，再生の恩恵（regenerating grace）の経験を語ることを，成人教会員の資格を得る必要条件としたことであった。これはどう考えても，過激な要求ではあった。しかし，キリスト教会で初めて，信仰と実践を法によって一様化するという積極的概念を持つ国家教会（state church）が，教会員の資格に，内面的経験による基準を要求したのである。New England の多くの教会で，その後生じた多くの問題は，この決定から派生したのである。神聖共同体（Holy Commonwealth）の形成は直ちに始まったのである。というのは，この事業に参加するという単なる行為が，この現世においての，共同体に課せられ使命に連なり責任を持つことを意味すると考えられたからである。Arbella 号に乗船していた総督の John Winthrop は，次のようなことを船中で書き表わしていた。（A Model of Christian Charity（1630）[19]

> "It is of the nature and essence of every society to be knit together by some covenant, either expressed or implied……
> For the work we have in hand, it is by mutual consent, through a special over-ruling providence and a more than ordinary approbation of the churches of Christ, to seek out a place of cohabitation and consortship, under a due form of government both civil and ecceliastical……
> Thus stands the cause between God and us：we are entered into covenant with Him for this work：we have taken out a commission, the Lord hath given us leave to draw our own actions……
> We shall find that God of Israel is among us……
> For we must consider that we shall be as a city upon a hill, the eyes of all people are upon us.
> （全ての社会が，何かの契約でそれが明白に表現されようと暗黙であれ一つに結び合わされることは社会の本質であり要締である。我々が抱えている仕事に関しては，格別の全てを支配する神慮と，キリスト教会の並外れた是認によって，行政上も教会に関しても適切な形態の政府の下で，共同で友愛の中で生活する場所を探求するのは，相互の同意によるものである。
> かくして，神と我々の間には大義が存在する。即ち，我々はこの仕事に関して，神と契約に入ったのである。我々は一つの使命を手にしたのである。主は，我々が我々自身の定款を作成することを許されたのである……我々はイスラエルの

神が我々の中におられるのを知るべきである。何故なら，我々は丘の上の都市のようになり，全ての人の眼が我々に注がれていることを考えなければならないからである。)

再び Hawthorne に戻り，第五節の Hutchinson 尋問の場面に目を向けてみる。

Hawthorne が，more picturesque style of narration を再び始める。

New England に冬の到来を知らせるみぞれ交りの雨が激しく窓を叩く，十一月の北風が吹き荒れている荒削りの粗末な木造の建物の中で，Israel disturber を尋問する法廷が開かれている。

正面の高い所に総督の Winthrop が位置を占めている。Hawthorne は，Winthrop を，短く簡潔に，それ故に効果的に，非の打ち所のない高徳の人物として賞讃している。

"……Winthrop, a man by whom the innocent and the guilty might alike desire to be judged, the first confiding in his integrity and wisdom, the latter hoping in his mildness."[20]
(ウインスロップ，潔白な者も有罪の者も同様にこの人に裁いてもらいたいと望むかも知れない人間である。前者は，ウインスロップの誠実さと英知を信頼し，後者はウインスロップの柔和さに望みを置くからである。)

この法廷の真中に，全ての人間の注視の的になって，その女(the Woman と Hawthorne は言う) が立っている。

"She stands loftily before judges, with a determined brow, and unknown to her self, there is a flash of carnal pride half hidden in her eye, as she surveys the many learned and famous men whom her doctrines have put in fear."[21]
(彼女は高慢な態度で，判事達の前に立っている。決然とした顔つきで，そして，自分の教理が不安に陥し入れた多くの学識のある有名な人達を見渡すときに，彼女の眼に半ば隠された，自分自身にも判らない，肉体的誇りを表わす光りがきらりと輝いたのである。)

Hutchinson の描写は短いが，第一節で攻撃した public woman の feminine ambition を，'loftily' や determined brow で表現している。a flash of carnal pride は注意を引く表現である。Amy Schrager Lang[22] は，次の様に指摘している。「法廷での尋問のいたる所で，Hutchinson は，Jezebel のように密通の罪を冒しているという仄めかしがあるのが判る。明らかに，律法不要論(antinomianism)は，抑えようもなく，姦淫やもっとひどいことに通じるだろうというのであった。極端な場合，Hutchinson が，Familists が抱いている，下卑で醜い，汚く異常な意見を持っているという非難には，異端 (heresy) を性的放縦 (sexual license) に結びつける連想が表現されている。」又，「John Cotton は，antinomians を非難する時，Hutchinson の性的行動についての疑問を中心にしていた。」と指摘している。これを考えて見ると，carnal pride の意味が理解できる。Hawthorne は

この法廷の記録に目を通し，この Hutchinson の性的不道徳についての非難を一語で極めて効果的に説明している。もっとも，Hutchinson や antinomians に関しての性的放縦は，伝説として定着しているのかも知れない。

Hutchinson に対する判事の尋問が始まる。才知溢れる Hutchinson は雄弁に，聖書に関する深い知識を持ち出して答える。

> "her answers are ready and acute ; she reasons with them shrewdly, and brings scripture in support of every argument ; the deepest controversialists of that scholastic day find here a woman, whom all their trained and sharpened intellects are inadequate to foil."[23]
> （彼女の答は即座でしかも鋭い，抜け目のない調子で理を説き，全ての言い分を支えるのに聖書を持ち出すのである。学問が大切にされた時代に，最も議論に通じている人達も，自分達の鍛え，磨ぎすました知力がその裏をかくのに，不十分な一人の女を知るのである。）

この尋問の場面では，Hutchinson の発言に焦点が当てられて，判事や Winthrop がどう発言したかは，省略されている。勿論 Hawthorne が，それらの発言を一つでも取り上げると，sketch では済まなくなることは承知の上であり，取り上げないのは，Hutchinson の発言が置かれている文脈は，New England の読者には十分に明らかであったからであろうと思われる。しかしここで，尋問の記録を取り上げて，Antinomian Controversy の核心が何であるかを理解しておきたい。

（The Examination of Mrs. Anne Hutchinson at the court at Newtown. November 1637.）[24]

> Mr. Winthrop, governor. Mrs. Hutchinson, you are called here as one of those that have troubled the peace of the commonwealth and the churches here ; you are known to be a woman that hath had a great share in the promoting and divulging of those opinions that are causes of this trouble ……you have maintained a meeting and an assembly in your house that hath been condemned by the general assembly as a thing not tolerable nor comely in the sight of God nor fitting for your sex, and notwithstanding that was cried down you have continued the same. Therefore we have thought good to send for you to understand how things are, that if you be in an erroneous way we may reduce you that so you may become a profitable member here among us, otherwise if you be obstinate in your course that then the court may take such course that you may trouble us no further. Therefore I would intreat you to express whether you do not hold and assent in practice to those opinions and factions that have been handled in court already, that is to say, whether you do not justify Mr. Wheelwright's sermon and the petition.

（総督ウインスロップ：ハッチンスン夫人，あなたは，この地の共同体や教会の平和を乱してきた人達の一人として，今ここへ呼び出されています。あなたは，この面倒な事の原因であるいろいろな意見を広めていることに大いに加担している女性であると知られています。……あなたはあなたの家で，会合や集会を開いて来ましたが，それらは地方議会で，神の眼から見ても許し難く，適当でなく，女性に相応しいことではないとして，非難されてきたことです，そして声高に止めるように言われたにも拘らず，会合を持ち続けてきたのです。それ故，一体どういう事になっているのかを理解するには，あなたに来て頂くことが良いと考えたのです。もし，あなたが誤っているのなら，あなたがこの土地で，我々の内にあって有用な一員になれるようにあなたを正道にもどせるかもしれません。もしそうでなく，あなたが頑なに今迄のやり方を通すのであれば，この法廷は，あなたがこれ以上，我々を困らせないようにする措置を取ることになるかもしれません。従って，私は，あなたが法廷で既に扱われてきた意見や徒党に実際に同意していないかどうか，つまり，ウィールライト氏の説教と彼についての請願書を正当と考えていないかどうかを，ここで表明していただきたいとお願いするのです。）

Winthrop の Hutchinson に対する問いかけは，丁重であるが厳然としていて，'Fast Day' の説教で Wheelwright が煽動的な内容のことを口にした罪で告発されたことに，無罪を要求する請願書を出した徒党の中で Hutchinson が指導的役割を果していること，そうした antinomians の不穏な言動が，Winthrop の Holy Commonwealth の平和を乱していることについて，Hutchinson の口から説明を聞こうとしているのであるが，理路整然とした，礼儀正しい口調であることは，Hawthorne が賞讃する人物像を印象づけるものがある。この Winthrop の問いに対して，Hutchinson の応答は，正に尊大（lofty）である。

Mrs. Hutchinson. I am called here to answer before you but I hear no things laid to my charge.[25)]

（私は，あなたの前でお答えするために呼ばれておりますが，私に対する告発については何も聞こえません。）

Gov. I have told you some already and more I can tell you.

（あなたに既にいくつか話しましたが，もっと申し上げることはできますよ。）

Mrs. H. Name one. Sir

（一つ挙げて下さい）

Gov. Have I not named some already?

（いくつか既に挙げたではないですか。）

Mrs. H. What have I said or done?

（私が，一体何を言ったり，したと言うのですか。）

Gov. Why for your doings, this you did harbor and countenance those that are parties in this faction that you have heard of.

（おや，あなたがしたことなら，あなたが知っている連中で，この徒党の共犯者たちをあなたはかくまい，励ましたではありませんか。）

Mrs. H. That's matter of conscience, Sir.
（それは良心の問題です）
Gov. Your conscience you must keep, or it must be kept for you.
（あなたの良心を，あなたは持っていなくてはなりません，さもなければ，あなたの代りに，良心を持っておかねばなりませんね。）

尋問が開始されてからの最初の段階で，総督である Winthrop と，被告である Hutchinson とのやり取りを読むだけで，Hawthorne が描く Hutchinson 像が正に迫真のものであることを感じる。 Mrs. Hutchinson は，異常で危険な徴候を示す，極めて厄介な重荷であったのである。

続いて，Winthrop は，Hutchinson に対する告発事項を Hutchinson に向って言うのである。

Gov. Let us state the case and then we may know what to do. That which is laid to Mrs. Hutchinson's charge is this, that she hath traduced the magistrates and ministers of this jurisdiction, that she hath said the ministers preached a covenant of works and Mr. Cotton a covenant of grace, and that they were not able ministers of the gospel, and……[26]
（……ハッチンスン夫人に対する告発は，この管区の行政官や牧師達を中傷してきたこと，牧師は，業の契約を説き，コットン氏は，恩恵の契約を説いている，そして牧師達が有能でないと言ってきた……ことである。）

そして，Winthrop と証人，Hutchinson とのいくらかのやりとりの後で，もう一度 Winthrop は，Hutchinson に問う。

Gov. Don't you remember that she said they were not able ministers of the new testament?
Mrs. H. Mr. Weld and I had an hour's discourse at the window and then I spake that, if I spake it.[27]

Hutchinson の返答は，そっ気ないもので，法廷侮辱罪に問われそうである。この後で Cotton が，Hutchinson を弁護する。そして Winthrop も Cotton の言い分に気持ちが傾くが，副総督の Dudley は引下らないで，執拗に，Hutchinson に迫る。ここで Hutchinson は，聖書についての深い知識と，自らの解釈に従って熱弁をふるう。

Dep. Gov. They affirm that Mrs. Hutchinson did say they were not able ministers of the new testament.
Mr. Cotton. I do no remember it.
Mrs. H. If you please to give me leave I shall give you the ground of what I know to be true. Being much troubled to see the falseness of the constitution of the church of England, I had like to have turned Separatist ;

whereupon I kept a day of solemn humiliation and pondering of the thing ; this scripture was brought unto me — he that denies Jesus Christ to be come in the flesh is antichrist — This I considered of and in considering found that the papists did not deny him to be come in the flesh, nor we did not deny him — who then was antichrist? Was the Turk antichrist only? The Lord knows that I could not open scripture ; he must by his prophetical office open it unto me. So after that being unsatisfied in the thing, the Lord was pleased to bring this scripture out of the Hebrews. He that denies the testament denies the testator, and in this did open unto me and give me to see that those which did not teach the new covenant had the spirit of antichrist, and upon this he did discover the ministry unto me and ever since. I bless the Lord, he hath let me see which was the clear ministry and which the wrong. ……

Now if you do condemn me for speaking what in my conscience I know to be truth I must commit myself unto the Lord.[28)]

（副総督：証人達は，ハッチンスン夫人が，牧師達は新約聖書を説く資格がないと言ったことを証言している

ハッチンスン夫人：どうか，私が真実であると知っていることの根拠を申し上げるのを許して下さい。英国の教会の機構が偽りであるのを知って悩んでいましたので分離派の一人になりたいと思いました。それで，一日中神の前に厳粛な気持ちで卑下しそのことを考えていましたところ，この聖書の言葉が心に浮かびました — イエスキリストが現われることを否定するものは反キリストである（ヨハネ1，2：18）このことを考えていて判ったことは，カトリック教徒は，イエスが現われるのを否定しませんでした，私達も否定しませんでした。それでは反キリストは誰でしょうか。主は私が自分で聖書を開くことができなかったことをご承知です：主は，その予言的合図で私に開いて下さるのです。そこで，主はヘブル書からこの言葉を示して下さいました。遺言を否定する者は，遺言者を否定する，ということです。そして聖書で示すことによって，新しい契約を教えない者は，反キリストの霊を持っているということを分らせて下さったのです。以来，このことに関して主は私に聖職者を見つけて下さったのです。主は私に，どれが正しい牧師か，どれが間違っている牧師かを分らせて下さいます。……

今，もしあなた方が，私の良心において真理と知ることを口にしているからと，私を非難なさるのなら，私は，自らを主に委ねなければなりません。）

Hutchinson は，sophistry と思われる弁舌で，反キリストは，新しい契約，恩恵の契約（covenant of grace）を説かない牧師であり，主が，正しい牧師と間違った牧師を区する力を与えて下さったと主張するのである。この発言に驚く副総督や尋問する Nowell に，更に，決定的な言葉を口にするのである。

Mr. Nowell. How do you know that that was the spirit?

Mrs. H. How did Abraham know that it was God that bid him offer his son, being a breach of the sixth commandment?
Dep. Gov. By an immediate voice.
Mrs. H. So to me by an immediate revelation.
Dep. Gov. How! an immediate revelation.
Mrs. H. By the voice of his own spirit to my soul. I will give you another scripture, Jeremiah 46 : 27-28 — out of which the Lord showed me what he would do for me and the rest of his servants.……
You have power over my body but the Lord Jesus hath power over my body and soul, and assure yourselves thus much, you do as much as in you lies to put the Lord Jesus Christ from you, and if you go on in this course you begin you will bring a curse upon you and your posterity, and the mouth of the Lord hath spoken it.[29]
（ノーウェル：それが聖霊であったとどうして判るのだ。
ハッチンスン夫人：アブラムは，それが六番目の戒律を破ることになるのに，自分の息子を差し出せと命じたのが神であることをどうして知ったのでしょうか。
副総督：神の直接の言葉によってである。
ハッチンスン夫人：私にとっても，同様，神の直接の啓示によるのです。
副総督：何と，神の直接の啓示とは！
ハッチンスン夫人：私の魂への聖霊の声によってなのです。エレミヤ書（46：27—28）をお示ししましょう。そこで主は，私に，私や神の僕にして下さるであろうことを示して下さいました。……
あなた方は，私の肉体を支配する力をお持ちですが，主は私の肉体と魂を支配する力をお持ちです。これだけのことは確信して下さい，それは，あなた方は，主イエスキリストをあなた方から遠ざけるために一所懸命だということです，そしてもしこんなことを続けるのであれば，あなた方や子孫に災いを招くでしょう。主はそのことを語られています。

Hutchinson の神の直接の啓示をめぐって，副総督と，Cotton の間でやり取りがあり，副総督が，Hutchinson の啓示は神のものであろうかと問うのに対して，Cotton は，「この法廷の判決が Hutchinson に何らかの災難を与えるかどうか知りたいものである，そうすれば，Hutchinson が，その災難から，奇跡（a miracle）によってか，或いは神の摂理（a providence of God）によって救われることを期待しているかどうか，分るだろう」と答える。これに対して，Hutchinson は，神の摂理によってと答える。

Mrs. H. By a providence of God I say I expect to be delivered from some calamity that shall come to me.[30]
（神の摂理によって，私に降りかかるであろう災難から救われることを期待しています）

Hutchinson の啓示をめぐって，尋問する側の議論が続くが副総督の Dudley が，1535 年に Munster で起った，Anabaptist の反乱を指導した悪名高い John of Leyden の例を挙げて，そうした動乱は，啓示によるものであったことを主張する。そして，「ハッチンスン夫人は，悪魔に惑わされていることを確信する。神の聖霊は，神の僕全てに，真理を語られるからである。」(I know not, for I am fully persuaded that Mrs. Hutchinson is deluded by the devil, because the spirit of God speaks truth in all his servants.) [31] と Hutchinson は悪魔につかれているとするのである。

総督の Winthrop は，これを受けて，結論を下す。「私は，Hutchinson 夫人が口にする啓示は，妄想であると判断する。」そして，Endicot は，「我々の間のこうした面倒な事の全ての基が，どこにあるか，世間の全ての人には判るであろう」と，Hutchinson が Holy Commonwealth に破壊的な影響を与えたことを認めるのである。

Hawthorne は，この場面を次の様に表現する。

> "Thus the accusations are proved from her own mouth. Her judges hesitate, and some speak faintly in her defence ; but with a few voices, sentence is pronounced, biding her go out from among them, and trouble the land no more."[32]
>
> (かくして，彼女に対する告発が，彼女自身の口によって証明される。判事達は躊躇する，そして何人かは彼女の弁護を弱い声で話す。しかし二三人の反対の声はあったが，判決が言い渡される：この土地と人達から立ち去って，これ以上面倒をおこしてはならない。)

Hawthorne は，Hutchinson に訪れる不運を，「彼女の敵は，天の怒り (the anger of Heaven) が後を追って行くと信じた」と述べ，総督の Winthrop が，その顕著な事例を記録していることを言う。そして，Hutchinson の夫が程なく世を去るが，Hawthorne は，この public woman に引きずられて生きたであろう夫にいささかの同情も示さない。

> "her husband, who is mentioned in history only as attending her footsteps, and whom we may conclude to have been (like most husbands of celebrated women) a mere insignificant appendage of his mightier wife.[33]
>
> (彼女の夫，この男は歴史に妻の歩いて行くところへ付き添っただけとして記されるのだ，そして我々は，この男を（大低の有名な女性の夫のように）自分より強い妻の取るに足らない付属物に過ぎなかったのだと結論してよいのである。)

最後の節は，静穏な自然の生活が，恐ろしい結末を迎える描写で，特に，インディアンに襲われ，幼児一人残して，全員が殺される場面は，凄味を感じさせる。

> "Her last scene is as difficult to be portrayed as a shipwreck, where the shrieks of the victims die unheard along a desolate sea, and a shapeless

mass of agony is all that can be brought home to the imagination."[34]
（彼女の最後の場面は船の難波のように描くことは難しい。犠牲者のかん高い叫び声は荒涼たる海で，誰の耳にも届かず消える。形のない巨大な苦痛が，切々と心に迫るのは，想像力によるのみである。）

III. 結　び

Hawthorne の "Mrs. Hutchinson" は，domesticity を欠く public woman として登場し，該博な聖書の知識と機知によって，自分の教義を説く集会を開き，神に力を与えられた眼によって聖徒を見分け，正しい牧師と偽りの牧師を分ける使命を神に与えられていることを公言して追放され，最後は悲劇的な結末を迎える。神の啓示を公言して追放された Hutchinson に，神の摂理が示されたと暗黙の内に語る Hawthorne のこのスケッチは，Holy Commonwealth の建設の基本的理念である Winthrop の 'a covenant of works' と Hutchinson の 'a covenant of grace' 対立のドラマである。

Hutchinson が，Boston の Puritan 正統の牧師と対立したのは，尋問の中で問題となったように，Massachusetts の牧師が，業の契約（a covenant of work）を説くことであった。

Winthrop が記したように，Massachusetts の指導者達は，行政と教会の両方の制度が調和して，神と New Israel の契約を遂行するものと考えた。神聖共同体（Holy Commonwealth）に参加する者は，教会の構成員であり，資格は聖徒（saint）であることであったが，それには回心の経験を語り，牧師と会衆によって本物と判断されることが必要であった。しかし同時に，その様な内面的確信だけでなく，公共の場での行為の中に回心の証拠が示されなければならなかったのである。「もし義認（justification）が，又は救い（salvation）の効果の一つが，善を望む潜在的な能力であれば，神の選び（election）は，聖化（sanctification），即ち善を行うことによって証拠づけられなければならない」と牧師達は推論したのである。聖化を，義認の一つの証拠として用いることによって，人間の行為（human behavior）を，"キリストに対する関心"（"interest in Christ"）の程度と結び付けることによって，目に見えないものものを，実際に見えるものにしようとしたのである。[35] そして当然のことに，道徳の問題，正しい振舞，権威への敵意，服従，家族の役割や関係，経済的責任などについて実質的な協定を当然としたのである。この様な輪郭を示さなければ，目に見える聖徒（"visible sainthood"）は，内容のない概念であったであろう。聖徒は，慈愛に満ちた業（gracious work）を遂行することができることで，"natural man" と違うと考えられたのである[36]。業の契約（a covenant of work）は，Massachusetts の社会を 'a city on a hill' のようにする基本的な宗教理念であった。

これに対して，Hutchinson の考え方は，神の恩恵（grace）を得るために，働き，戦い，努力するというのは，全く無駄である。キリスト教徒は，キリストが中味を充してくれるか，充してくれないか分らない空の器の様なものである。聖徒のこの世での行いは，彼自

身のものであり，キリストのものでもある。そしてその行いは，永遠の運命とは関係がない。人間の間の最も重要な区別は，— 再生された者(regenerate)と見棄てられた者(reprobate)の区別 — は，目には見えない。こうした観点からすると，完全なキリスト教徒(perfect Christian) は，自我を空にし，キリストに信頼し，自分が神に依存していることが，救いを確信して知ることで報われる瞬間を，受動的に待つのである[37]。従って，Hutchinson, つまり antinomian は，Massachusetts の指導者が苦労して築いた体制を崩壊させようとしたのである。Hutchinson が，神から直接受けた啓示は，目に見えないものを，業によって見えるものにしようとした全ての努力を拒否することであった。聖霊の証し(witness of Spirit)，つまり予言 (prophecy) という啓示は，外面的に証明できるものではないし，もし神の選びが聖霊によってのみ啓示されるのであれば，当然験べることはできないからである。Anne Hutchinson は，神の啓示を唱えることで神以外の全ての外的権威を否定したのである。そしてそれは Massachusetts の Puritan Colony を否定したことになったのである。

Hawthorne は，Puritan の妥協を許さない狭隘さ[38] (uncompromizing narrowness of the Puritans) を，Hutchinson の追放の一因としているが，もしも Hutchinson の唱導する 'a covenant of grace' が，聖書解釈上の論争に終始するだけのものなら，追われることはなかったであろう。共に主キリストを信仰するという不敵の盾を手にして地上の権威の否定，即ち体制の破壊という脅威の剣を，振りかざしたことが，女性である Hutchinson の悲劇を招いたのである。

引用文献

1) A Religious History of American People ; Sydney E. Ahlstorm New Haven and London Yale University Press 1972
Puritans in America : A Narrative Anthology Edited by Alan Heimert and Andrew Delbanco Harvard University Press 1985
から引用されている.
2) The Puritans in America p. 154
3) ibid. p. 154
4) Tales and Sketches : Nathaniel Hawthorne The Library of American 1982
5) ibid. p. 18
6) ibid. p. 18
7) ibid. p. 19
8) Prophetic Woman : Amy Schrager Lang University of California Press 1987
9) ibid. p. 7
10) ibid. p. 7
11) Tales and Sketches p. 20
12) ibid. p. 20

13)	ibid.	p. 21
14)		
15)		
16)		
17)	A Religious History of The American people	pp. 124-139
18)	ibid.	p. 126
19)	ibid.	p. 146
20)	Tales and Sketches	p. 22
21)	ibid.	p. 23
22)	Prophetic Woman	p. 43
23)	Tales and Sketches	p. 23
24)	The Puritans in America	p. 156
25)	ibid.	p. 156
26)	ibid.	p. 157
27)	ibid.	p. 158
28)	ibid.	p. 159
29)	ibid.	p. 160
30)	ibid.	p. 161
31)	ibid.	p. 162
32)	Tales and Sketches	p. 23
33)	ibid.	pp. 23-24
34)	ibid.	p. 24
35)	Prophetic Woman	p. 19
36)	ibid.	p. 19
37)	ibid.	p. 19
38)	Tales and Sketches	p. 24

On Puritanism in New England, in relation to Antinomianism

Masao OKAMOTO
Faculty of Liberal Arts and Science
Okayama University of Science
1-1 Ridaicho Okayama 700 Japan
(Received September 30, 1992)

This study is to pursue the historical developments of Puritanistic developments in the context of the early stage of Massachusetts Bay Colony.

At the beginning, "Mrs. Anne Hutchinson" published by Nathaniel Hawthorne in 1930 was taken up to make a comparative study with the record of the examination of Hutchinson at the General Court in 1937, and with Puritan Writings, with a view to understanding the heart of Antinomian Controversy.